

図書館員の基本的な姿勢

朴 木 貞 子*

抄 録

図書館の背景を世界史的にたどることによって、世界の図書館界の動向を概観し、日本の図書館の基本的問題点を正しく認識したい。その上に立って、病院図書室と医療情報網との位置関係、その果すべき機能と可能性、更に経営的な立場に立った具体的な日常業務のあり方を考える。

はじめに

基本的な三つの事項を正しく認識していただきたい。

第1に図書館は読書の自由を保障する社会機関である。

この含蓄ある言葉を、何度も反響してみたい。これをいい替えれば、図書館は「誰でも、何でも、何時でも、どこでも」利用できることを約束する社会機関であるということである。

利用者にとって、これは権利であると同時に、個人の書齋ではない最大利用のための制約と、われわれ意識＝共同体意識を約束することなのである。それは利用者が自覚すべきことであると同時に、館が正しく認識させるべき課題でもある。

設立主体にとって、この機能を保障することは図書館理念に基づく組織的財政的基盤を意味する重大なものである。現在多くの館は

自然集積的な書庫に対して社会機関としての役割を自負することなく、安易に自称するきらいがあります。機関内拘束が強い所以でもありましょう。設立主体が社会機関であることの認識を深め、館員との間に理念上の合意がなければ、館の成長は望むべくもありません。

更に館員にとって、これは大変な課題です。「誰れでも」まずこの一語につまづき、「何でも」に対してはほとんど絶望的な状態なのです。慢性化した絶望は怖るべきです。どうしたら、「誰れでも、何でも、……」が可能になるのか、総ての図書館員が、館の枠を越えて英知の限りを尽して対応しなければならない課題です。

第2に図書館員は決断と責任を持つ、確立された「個」であること。

館員自身が文化遺産を駆使することを出発点として現実を正しく見つめ、分析し、抽象化し組立てる。その正しい認識のうえに見通しが生まれ、始めて断乎たるライブラリアンとしての「決断」が生まれるのではないでしょう。マックス・ウェーバー（1864-1920）の言を借りるならば、「情熱と責任と見通しを！」です。

第3に図書館員が図書館操作の主体であること。

いま図書館を担う館員が正しい認識の上に決断と責任とを持って参画するならば、当然

図書館運営の主体は館員にある筈です。正しい図書館理念なくして、問題処理に適切な、How to が生れるわけがないのです。自負と自覚とを切望してやみません。

歴史的展望

BC 3000 年におよぶ記録保存は、純粹に機能的、功利的な必要から始まり、人類の知識・思想のあゆみを確実に保存し後世への遺産としました。それは永く中世まで寺院や貴族の手で懇ろに温存されました。12世紀以後、商工業の発達、都市の発達に促され、歴史的文化遺産は、意識的に普及伝達され、経済的な繁栄と相伴なって、ヒューマニズムの誕生をみ、ナショナリズム、資本主義、共産主義へと展開していきます。ルネッサンスの立役者ダンテ（1265～1321）はこうっています。「人間の条件は、自分の責任で自分の行動を決することだ」と。この言に始まる西欧は、以後数世紀間人間の尊厳をめぐる断絶の葛藤を続けます。

17世紀のホブス（英）、18世紀のスマス（英）、ルソー（仏）は個人の尊厳を道徳的・倫理的・哲学的に、経済学・法学・社会学・教育学の各分野を話しことばで説きほぐしました。学問大系としてではなく、話しことばで語られたことは西欧の人間づくり、社会づくりに大きく貢献し、自我の確立は徐々に浸透していきます。1776年、「万人は自由・平等であり、人権をそこなう政府は廃する権利がある」と高らかにうたったアメリカの独立宣言は、西欧文化の一区劃であり、まとめでありました。そこにはギリシャの民主主義・ローマの共和制・イギリス的自由・フランスの哲学、そしてアメリカの「決断」がこめられていました。

次いで1789年、フランス革命は自由・平等・博愛を掲げました。これは200年後のいま、なお全人類の悲願です。

図書館が意識的に作動し始めたのは、1731

年のフィラデルフィア図書館会社（＝フランクリン図書館）の設立からです。これは始め、より豊かな知識と意欲的な生活を求めた会員制の読書会兼研究発表会でしたが、やがて公共図書館へと拡大、成長していきます。

19世紀中期、ニューハンプシャー（1849）ボストン（1852）を皮切りに税による公共図書館の設立が相次ぎ、基金・職員・情報蓄積へと図書館はめざましく生長します。エドワーズ、エドワードをもって総括される図書館技術論にささえられて、公共図書館の理念は全歐にはっきりと定着します。

フランスは国立図書館から都市へと発展しドイツは都市から国立へ、英・米は組合図書館の傾向から州、国へと住民の要求による公教育の場として税による図書館が根を張りました。20世紀中頃までに西欧の図書館は、というより図書館員は文化・学習のインフォメーション・センターの役割を意欲的に果し、更に大きく国家的世界的規模のインフォメーション組織を考えるに到ります。

「1館ではどうにもならない」このことを正しく認識し得たのは、今世紀最大の成果でした。1948年のファミントンプランは画期的な相互提携として全米に及ぶ分担購入、相互利用計画です。幸なことにこの計画は、機械化と相まって情報の蓄積・検索・利用の実を着実にあげ得たのです。

1965年代、コンピューターの国際化にともない情報流通は国際化の波にのり、多くの情報蓄積・検索システムが図書館周辺を取り巻くように、縦横に張りめぐらされました。

1972年のMEDLARS on LINE始動は固唾をのむようなドラマでした。米国のライブラリアンは利用要求を背景に国を動かし、国内にとどまらず世界的な情報網を可能ならしめたのです。その着想の大きさは実に驚嘆すべきことでした。国の意図が死亡率低下を目指す医療情報流通機構にあったとはいえ、この情報網機能は図書館の現代的意味を明確に位置

づけたといえます。

引き続きCAT LINE (Catalog on line)、SER LINE (Serials on line)が動きだし、従来の整理技術に比重のかゝった図書館運営は、明らかに活用面にその機能を拡げ、館員は利用の相談役としての実質を求められる傾向を強くしました。一つは主題に対する知的背景であり、他の一つは情報に関するToolとSystemへの精通です。両者は一面では館員の積極性に裏づけられ、他面では館員を鼓舞するという二重の作用を果しているようです。

この年代さらに特筆すべきことは、1964年にBLLD (British Library Lending Division)が国際的な貸出システムを作動させたことです。従来の技術偏重の図書館論とは発想を異にするBLLDの誕生は、利用を目的とする情報伝達の機能に新たなメスを入れました。確かに技術偏重の図書館論は、情報の巨大化と混乱の中で社会科学的文化伝達機能へと拡がり余儀なくされ、従来の図書館学と情報科学との包含をはっきりと認識させられる事態に立ち到ったといえます。

目録の国際化も定着の波紋を拡げています。現在図書館はきっぱりと世界的な規模で、「誰でも、何でも、何処でも、何時でも」を意図し、着実に成果をあげているといえます。

さて、19世紀末鎖国から目を開いた日本は、まず自由民権運動の熱気にあおられます。学習サークルが全国に5～6000、およそ100万人が参加し、ルソー、ミル、スペンサーが熱っぽく論じられたといえます。図書館は福沢諭吉の「西洋事情」(1866年)で紹介されて以来、書籍館(1872年・明治5年)を皮切りに自由民権運動と相まって、新聞縦覧所、公共図書館設立が相次ぎました。しかし政府は「豊かな個人」を黙殺する政策をとりました。1887(明20)年、保安条例・1900(明33)年、治安警察法・1925(大14)

年、治安維持法・1928(昭3)年、特高警察全国配置・1941(昭16)年、言論出版・集会結社等臨時取締法。

この小刻みな陰湿な思想抑圧の強化と合せて教育勅語(1890・明23)・国定教科書制度成立(1903・明36)、国をあげて勤儉、勤勉、推譲を旨とする教育を徹底させました。明治の終りには、日本中の小学校に二宮尊徳の像が立ち、儒教思想と相まって集团的画一化をもって、国力充実の近道をひたすら突進しました。日清・日露・満州・日中の戦争はいずれも挙国一致が相言葉でした。やがて一億一心火の玉となって第2次世界大戦(1941-45)に突入する羽目になります。その間、図書館は国策による成人教育の場として青年団等のささえの下で数を増やし、[表1参照]質のうすい読物の図書館に変ぼうしていきます。

[表1]

明治38	101館
明治41	200館
大正5	1,092館
大正15	4,337館
昭和21	4,000館

明治38年には1館平均11,000冊であったものが、昭和21年には4000館中その90%は3000冊以下という名ばかりの図書館になりました。かつてはキングスレー館(1897)、成田図書館(1901)等、活気的な発芽をみながら日本の図書館は、国家的圧力の下に息をひそめてしまいました。

第二次世界大戦の後、アメリカの挺入れが大きくあって、1950年に図書館法、1954年に図書館の自由に関する宣言、1953年の中小都市における公共図書館の運営、いわゆる「中小レポート」に到り、公共図書館の近代化が始まります。西欧と共に「何時でも、何でも、誰でも、どこでも」が一応、

図書館の相言葉になったのです。が、日本ではこの言葉は今尚、仰ぎ見る「理念」であり、民主的な動きは感じられるものの、いささか館別・館種別の色彩の濃い動きに低迷しているくらいがあります。相互提携では群をぬいてまとまりを見せている医学図書館分野ですら、「グローバルな芽」が根底に育っているとはいいがたいのです。戦後の高度経済成長は、一応図書館には幸いしましたが、個人の成長と社会的認識とを軽視した急速度の成長は、近代抜きを露呈しています。いま日本は個人と社会認識とが未熟のままに経済成長の壁の中でもがいています。今ほど「個体の確立」が必須の課題となった時代は、日本史上かつてなかったのではないのでしょうか。個体の確立を同時にグローバル視野に立って活動することを余儀なくされている時代背景を正しく認識し、行動したいものです。

目 的 と 組 織

社会的、図書館史的な眼を背後に意識しながら内的条件、外的条件を客観的に正しく認識する時、濁りない図書館の目的が生まれる筈です。内的条件にこだわりすぎると、マイナス要因だけが拡大され、孤立化を深め、図書館の存在意義すら失う結果になりかねません。外的条件、外部事情の変化を正確に捕え、内的条件を補い、成長に加速度を加えるための計画的な導入を試みていたゞきたい。

まず、図書館活動の総体に於ては組織・運営・収書・整理・奉仕・渉外にわたる全面構想を練りに練ることです。たとえ日常業務に追われても全面構想を念頭から放さず、その業務の持つ意味を考えることが問題解決に通じるのだと考えていたゞきたい。小規模図書館の館員は「部分」に吸い込まれない強靱な経営者でなければなりません。そして基本的

にはあくまでも「医療情報の全てを利用者に提供する義務と責任」を大前提とします。内的条件は予算・職員・蔵書のことごとく無い無いづくめの病院図書室ですが、外的条件はかつてない程にバラ色です。

「相互貸借」は当面、大学図書館の協力を得てこと欠かず、その遠景には拠点図書館構想が微笑んでいます。

「文献検索」は各種ある中でMEDLARSを含み医学中央雑誌の包含が予定されている JI CST (日本科学技術情報センター) - 厚生省 - の医薬品情報 (生涯教育のための Dial Access サービス) は活用したい機能です。機械検索が万能ではありませんが、蔵書の積重ねが少ない、将来ともに予算・スペースに限界がある病院図書室にとって、これはマイナスではなく特質です。膨大な蔵書を抱える大図書館には考えられない、小廻りのきく、きめ細かな機能が特質なのです。この特質を補佐するものとしての機械検索は、量と時間の面から欠くことのできないベースといえます。

情報入手の手段は郵送が一般的ですが、テレックスがかなり定着し、いままた、エレファックスによる電送が、実用的可能を高めています。

目録作業に関しては、Mark, Japan Mark または業者による目録カードの活用が、手の届くところまでできています。小規模図書館の目録機能と作業のあり方は再考されるべきでしょう。このような外部機能導入の可能性を常に念頭に置きながら作業を進めて下さい。

奉仕に関する情報は刺激的です。Clinical Medical Librarian や Patient Librarian の能動的な活躍が目され、その内容も館員が資料を駆使して提供するという質の高い変化に富んだものです。既成概念にこだわらない要求分析が生き生きと示されている興味深い活動です。

何よりも正しく認識していたゞきたいのは組織です。皆さんは、既に組織を通して考え

協力し合い、もの申すことが可能だということです。組織に参加することは単に顔を出すこと、出席することだけではありません。take part、つまり部分を受け持つことが参加の本意です。目的に合った合理的な組織運営を計画して下さい。

以上、病院図書室周辺の事情をいくつか挙げてみました。しかし、いかなる機能でも図書館の戸口まで自然に運ばれるものは一つとしてありません。どの機能を引き寄せるかはライブラリアンの「決断」にあります。最も期待し、最も興味深い点です。

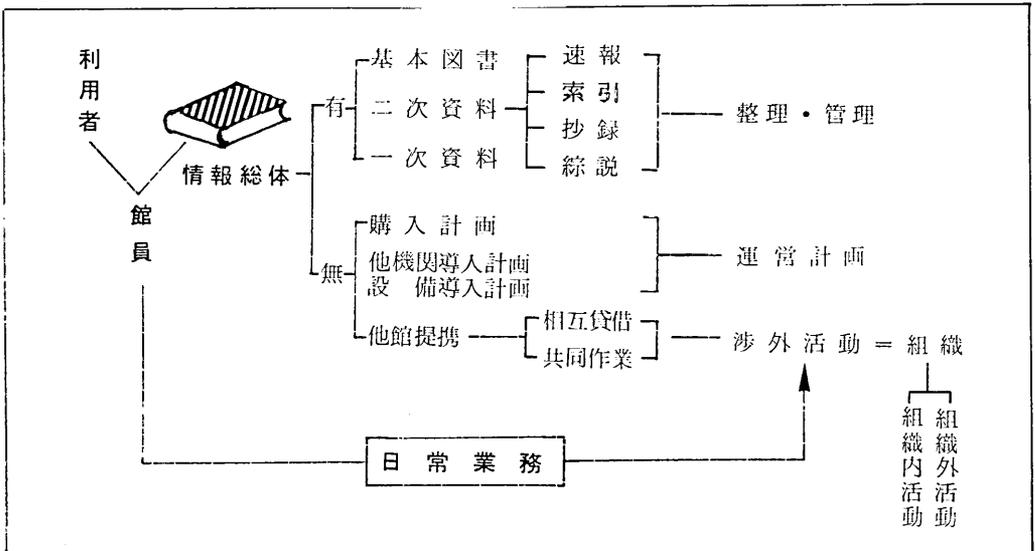
さて、内的条件に的を絞りましょう。「医療情報の総体を利用者に！」の前提に立つ時、第一に所蔵の有無が明確でなければなりません。所蔵書に対しては整理・管理の技術論で一応納まりがつかます。しかし無いものに関しては、購入計画・他機関および設備の導入計画として、予算処置をとるものと、他館との提携を目指す渉外活動をあげねばならないものがあります。

全医療情報総体に対して、所蔵が極少ならば、その整理・管理をいかに綿密にしても

所詮は極少のサービスです。それよりは、無いものの引き込み充実を計ることがより大きなサービスに繋がることは当然の理です。これは整理・管理の軽視を説くものではありません。比重の問題です。最少限度の労力で館内の機能化を計り、より大きいサービスのための「渉外の重要性」を認識していただきたい。館がひよわであればある程、能動的に他と提携しなければならないことを理解していただきたいのです。

渉外の場合としての組織は、既に巾広く活動し、一館では果し得ない大きな役割を果たしています。相互貸借の裏面には、基本作業としての共同目録作り、他の組織への働きかけ、情報交換、人的交流、教育の諸点に非常な労力が費されています。敬意を表するのに吝ではありませんが、しかし今なお、組織内の所蔵が明確でないのは頷けません。組織の目的が情報流通にあるならば、逐刊・単行書を問わず、その総合目録機能は組織の基本的な欠くことのできないツール（Tool）であり、組織集約の要でなければならない筈です。各館の目録体勢の弱さが滲み出ていることは頷

[表2] 情報の総体と日常業務の関係



けますが、組織として放置できない点でもあります。既製カードの導入が不十分なら、共同購入・共同目録作成の合流も考えられます。大きな合流なくして小図書館の作業合理化は非常に困難でしょう。組織の理念と目的とを改めて問いたいところです。

～ 日常業務の割振り ～

日常業務は全貌がつかめたならば、流され

る前に割振ることです。割振りの均衡がくずれたならば、原因・問題点を全面構想の視点から分析し、改めて業務割振りをすることです。これは絶えず軌道修正しながら、全面構想に近づこうとするための姿勢で、日常業務の未消化部分を葬り去ることは発展の芽を摘む結果になるでしょう。

参考までに標準モデルを [表 3] に示します。

[表 3] 職員の配置数と図書館サービスの標準モデル

人員	1 名	3 名	5 名
特 徴	資料整理	資料整理 基本サービス 相互協力活動	資料整理 基本サービス 相互協力活動 文献情報サービス
対 象	機関内職員	機関内職員 機関関連施設	機関内職員 機関関連施設 都区保健医療施設
内 容	所在教示 外部機関紹介	所在教示 外部機関紹介 書誌事項調査 相互協力	所在教示 外部機関紹介 書誌事項調査 相互協力 遡及文献検索 文献継続検索

(都立医学業研究機関における文献情報の効率的利用について；1979より)

このモデルは、作業展開のステップとして興味深いものです。しかし職員が5名いれば文献検索が可能だという見方をするならば、「待った」をかけねばなりません。病院図書室機能の低迷は決して職員数だけにあるのではなく、むしろ機能的経営方針の欠如にあることを指摘したいのです。必須の機能ならば、何を差置いても持たねばならないのです。たとえ職員1名でも…。但し専任者0名の館

は別です。このケースは、むしろ開館以前の問題であり、別に考えるべき類です。

試みに、実際の作業処理時間を算出してみましょう。[表 4] 参照。

[表 4] は、年間量を1名で処理した場合の数値です。(統計は職員数0.5名を示していますから、現実には作業内容が圧縮・除外されているとみなされます。)

[表4] 年間・週間当り作業処理時間

作業内容	年間量	作業割合	単 位 作業時間	年 間 必要時間	1週間当 りの時間	備 考
蔵 書	7,500冊	15%		210 時	4 時間	作業内容； 貸出事務・保管管理
年 間 増	300		45分	225	4.3	単位作業時間；整理時 間調査による概数
誌 数	500種		5	200	3.8	単位作業時間； 月間200部として推定
相 互 貸 借	250件		20	83	1.6	単位作業時間； 発信・受信を推定
Ref. 案内		15		210	4	
管 理・庶 務		20		280	5.4	
涉 外		10		140	2.7	
Lose time		10		140	2.7	
計				1,488 (約213日)	28.5 (約4日)	

◆年間量：病図協統計平均価概算 1977 ◆作業割合：米公共図書館の割合参考，世界大百科辞典 平凡社 1966，「トショカン」の項 ◆年間増単位作業時間：図書館ハンドブック，4版 1977,p 222

日常業務を年間、週間に割振って効率の高い、必要最少限の作業をし、合理化・外注・パート導入をたくみに活用して実質的な増員を企てるべきでしょう。計算通りには・・・と戸惑うよりは、実際に試みて数価を動かして活動と要求の基盤にすべきです。実数がなければ、いかなる要求も説得力がありません。

日常業務を考えるもう一つの要素に「経済性」を考え合せます。図書館は利益も損失も考えない・・・では活動が停滞します。

試みに、月給15万円の職員を考えましょう。年間16カ月分支給、200日就労するとします。1日12,000円、1時間約1,700円即ち1時間の労働が1,700円に値する作業を選択することが基本になります。単価が万能尺度ではありません。必要度・能力・量が加味されますが、作業の発足・中止・合理化・継続の是非を決断する際の目安になることは確かです。

考え方の例を挙げてみましょう。

[目 録]

利用が低いとはいえ、必須の作業、作成能力はある。しかし自館作成は約1,300円要する。①簡略記入で単価が動くか。②利用が低いならば、1度書きで多面アプローチの可能なパンチカードの活用は？ ③既成カード、Mark, Jap Mark, 業者カードと併用する方法は？ ④外注ならば？ ⑤加盟館協同購入で購入館カードと加盟館総合目録同時作成の可能性は？

[製 本]

技術的に不可能。全面外注、但し一律製本保存の必要性は？ ①コピーの利用が多い昨今、合本製本の必要と限界は？ ②利用ピーク時の製本処理の是非。③ユニーク・タイトルのみ限定製本は？ ④保存期間の制限は？ ⑤加盟館保存協定は？

[文献検索]

5カ年週及検索をマニュアルで行う場合、

必要時間約30時間（IM，医中）。人件費、51,000 円。

- ① IM を長時間肉眼でみることの是非 ② 検索時間捻出の可能性 ③ 職員の主力を検索用語決定に絞れる機械検索ならば？ 設備費・検索費・事務費は？ ④ 病図協に検索センターは？

・主題は、ダイナミックな拡がりを見せる筈です。常に「医療情報の総体を利用者に」この理念を見失わず、情熱的な試みがなされることを切望します。

1981. 6. 18.

[参考文献]

- Johnson, E.D. 著 小野泰博訳：西欧の図書館史，1965
椎名六郎・岩猿敏生共著：図書館概論，1977
Karstedt, Peter 著 加藤一英・河井弘志訳：図書館社会学，1980
Barr, Keith and Line, Maurice 共編 松村多美子他訳：英国における美術情報と図書館，1978
石井 敦・前川恒雄共著：図書館の発見，1973
内田義彦：社会認識の歩み，1971
津田良成：医学図書館の未来像，医学図書館 26:1-11，1979

